愛鷹山南麓の古墳群と浮島ラグーンの開発

藤村　翔

1　はじめに

愛鷹山の山体には、およそ 10 万年前の火山活動の停止以後、浸食により深い谷がいくつも刻まれ、その南方に広がっていた浮島沼（潟湖、ラグーン）に向かって張り出すように丘陵や河岸段丘が発達する。南麓の谷部や丘陵上には、主として 6 世紀末から 7 世紀にかけて、総数 1,000 基以上を数える多数の古墳群が並立して展開した。ここでは愛鷹山南麓の古墳群を、浮島沼ラグーンを生産基盤とした集団の奥津城として捉え直すことで、地域社会の変遷と大型群集墳の発生要因を検討したい。

2　須津古墳群の概要

須津古墳群とは　須津古墳群は、愛鷹山南西麓を流れる須津川の周囲に広がる 209 基の古墳から構成される。4 世紀に浅間古墳（前方後方・91 m）、5 世紀末～ 6 世紀前半に天神塚古墳（前方後円？・51 m）、寺屋敷古墳（不明）、琴平古墳（円・30 m）が築かれた後、6 世紀末頃から中里 K 支群において横穴式石室を主体部とする群集墳の形成が始まる。

千人塚古墳の登場　須津古墳群のなかでは新興の墓域である神谷（須津）支群に 7 世紀中頃に築かれた千人塚古墳は、駿河東部地域では最大級となる全長 11.4 m以上の大型横穴式石室を有する。金銅装毛彫馬具のセットを保有する千人塚古墳の主たる被葬者は、飛鳥時代の駿河東部地域を代表する首長の一人であったことは疑いない。とりわけ、愛鷹山南麓を墓域とした集団のなかでは傑出した指導者であったとみられ、東海・関東の境界に設置された後述する王領の現地経営や水陸交通の管理、軍備を担った地域首長として評価できる。

3　愛鷹山南麓古墳群の被葬者集団

横穴式石室からみた集団像　横穴式石室規模による階層構造からは、各共同体構成員の集団は、中型上位～大型石室の指導者層を上位とするタテの構造で統率されたことが明らかである。ただし、集団同士は没交渉的なものではなく、石室平面企画の共有状況からは、墓域の異なる集団でも、古墳構築の際にはヨコ同士の活発な繋がりがあったことが推定された。このことは、集落などの生活域において、墓域の異なる集団同士が雑多に居住していた可能性も想起させる。

装飾付大刀からみた集団像　大刀形式によって表象される役割については、袋頭大刀を軍事活動、環頭大刀を外政・技術を掌握する職掌とみる見解が参考となるが、東海・関東諸地域の有力層においてはまず軍事が第一に重視されるという（内山 2019）。

各古墳群単位でも各種の大刀形式がみられる点を重視すれば、一つの集団内に性格や職掌が異なる人格がモザイク状に参画していた状況を推察できるが、そのなかでもまず軍事的な役割が当古墳群の指導者層に期待されていたことが窺える。

農工・生産関連具からみた集団像　愛鷹山南麓古墳群には、土木具（鎌）、木工具（鉈、錐状鉄製品）、や紡織（紡錘車）、布・皮革生産関連（針）やその関連遺物が副葬されるものがある。また鉄器生産や加工に関連する工具（提砥）や関連祭祀具（鉄鐸）も出土する。こうした農工・生産関連具の特徴は、富士山南麓において土木開発や手工業生産を主導した伝法古墳群でみられた遺物構成ともよく共通し、愛鷹山麓周辺の集団内にも、同種の技術者や彼らを束ねる指導者が存在したとみられる。また先述した鉄鐸のほか、金銅製鈴や銅釧、装飾付ガラス玉などの渡来系装身具類の副葬状況も顕著であり、集団内部に渡来系技術者が存在した可能性がある。

4　浮島ラグーンの開発と倭王権

田子の浦砂丘上の集落群と中原遺跡　中原遺跡は駿河湾沿岸部の田子の浦砂丘上、浮島沼に面して立地する集落跡であり、これまでに 250 棟以上の竪穴建物が調査されており、7 世紀代における駿河東部地域を代表する集落の一つといえる。7 世紀代には豊富な手工業関連遺物（砥石、紡錘車、ガラス小玉鋳型）や、各種鉄製品（鉄鏃、刀装具、馬具）、玉類などが出土するほか、8 世紀代に鍛冶具（鉄鉗）や鉄滓といった手工業関連遺物、銅製鉸具、分銅が

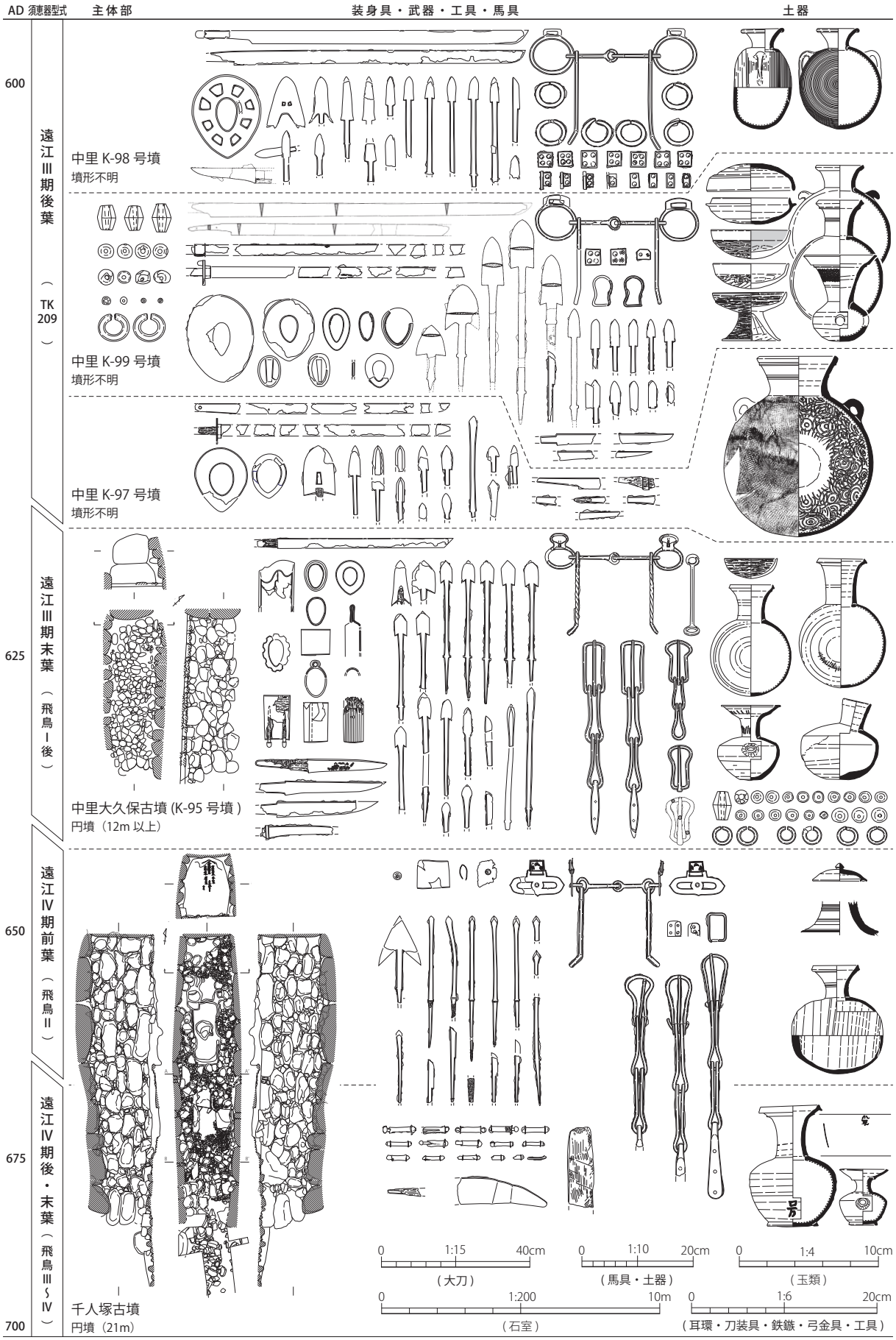

図 1　須津古墳群の横穴式石室と主要遺物

出土する。さらに、7 世紀代より鉄製釣針や大型土錘などの漁具のほか、回遊性魚類の煮炊き用とされる土師器の大堝がまとまって出土した点も特筆される。中原遺跡の性格としては、全国的に極めて珍しいガラス小玉生産を筆頭に、鍛冶や製糸・布生産なども担う、複合的な手工業生産・水産加工拠点集落として評価できる。

稚贄屯倉と砂丘上の集落群　中原遺跡のような田子の浦砂丘上の集落を評価する上で見過ごすことのできないのが、稚贄屯倉の問題である。『日本書紀』に登場する稚贄屯倉は、現在の田子の浦港から沼川周辺に 7 世紀前半頃に設置された、上宮王家（聖徳太子の一族）への堅魚製品の貢納拠点とみる説が有力であり、漁具や水産加工具が集中する中原遺跡の特徴とよく合致する。仁藤敦史氏は早くに、稚贄屯倉を「大王への大贄と対応し、有力な皇子（稚・ワカ）へ貢納物（贄・ニエ）を献上するために設定された屯倉」とし、「原初的なミツキ・ニエとして堅魚製品が（上宮王家へと）貢納された段階」に機能したことを推定する（仁藤 1996）。

5　おわりに

王領の設置と大型群集墳　中原遺跡の高度な複合的生産集落が、浮島沼ラグーン沿岸の「王領」化の産物の一つであったとすれば、同集落から浮島沼を挟んだ対岸に展開する愛鷹山南麓の古墳群の集団は、その王領を現地経営した共同体構成員やその指導者層とみなせる。愛鷹山古墳群と浮島沼ラグーンは、東海における大型群集墳の偏在性と「王領」の観点からも、重要なモデルになり得る地域である。

主要参考文献

内山敏行　2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30、雄山閣

仁藤敦史　1996「駿河・伊豆の堅魚貢進」静岡県地域史研究会編『東海道交通史の研究』清文堂出版

（富士市市民部文化振興課）

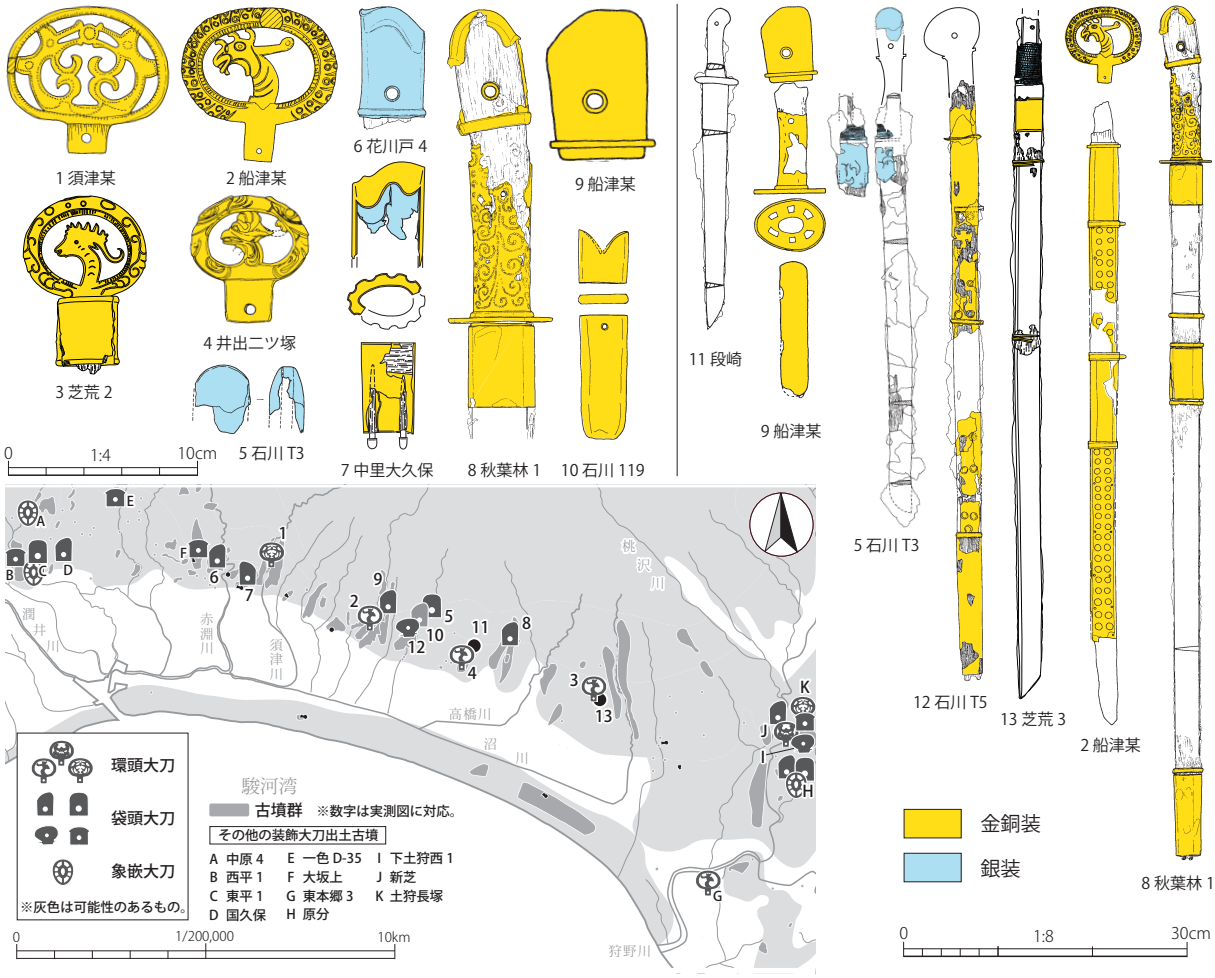

図 2　愛鷹山南麓古墳群周辺の装飾付大刀

※ 遺物図は各報告書等より転載

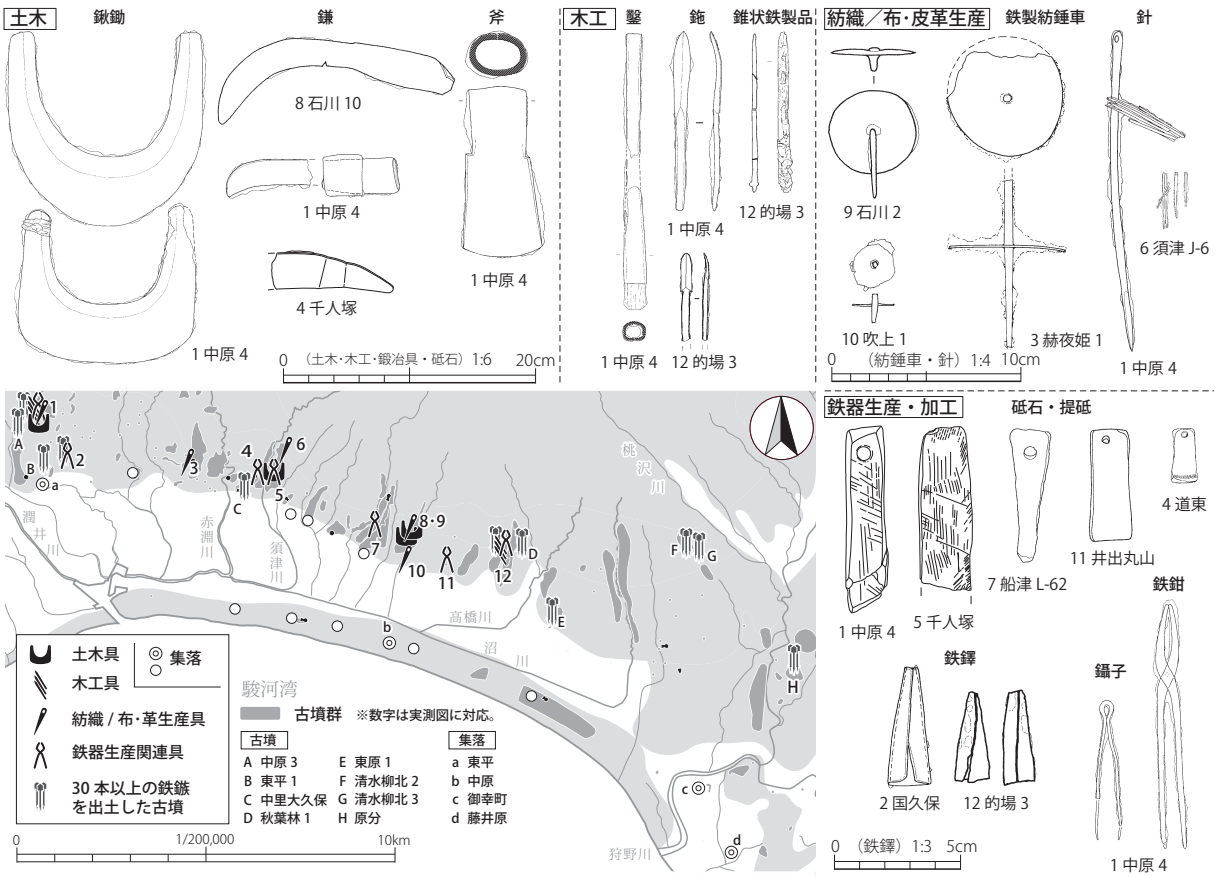

図 3　愛鷹山南麓古墳群周辺の農工・生産関連具

※ 遺物図は各報告書等より転載

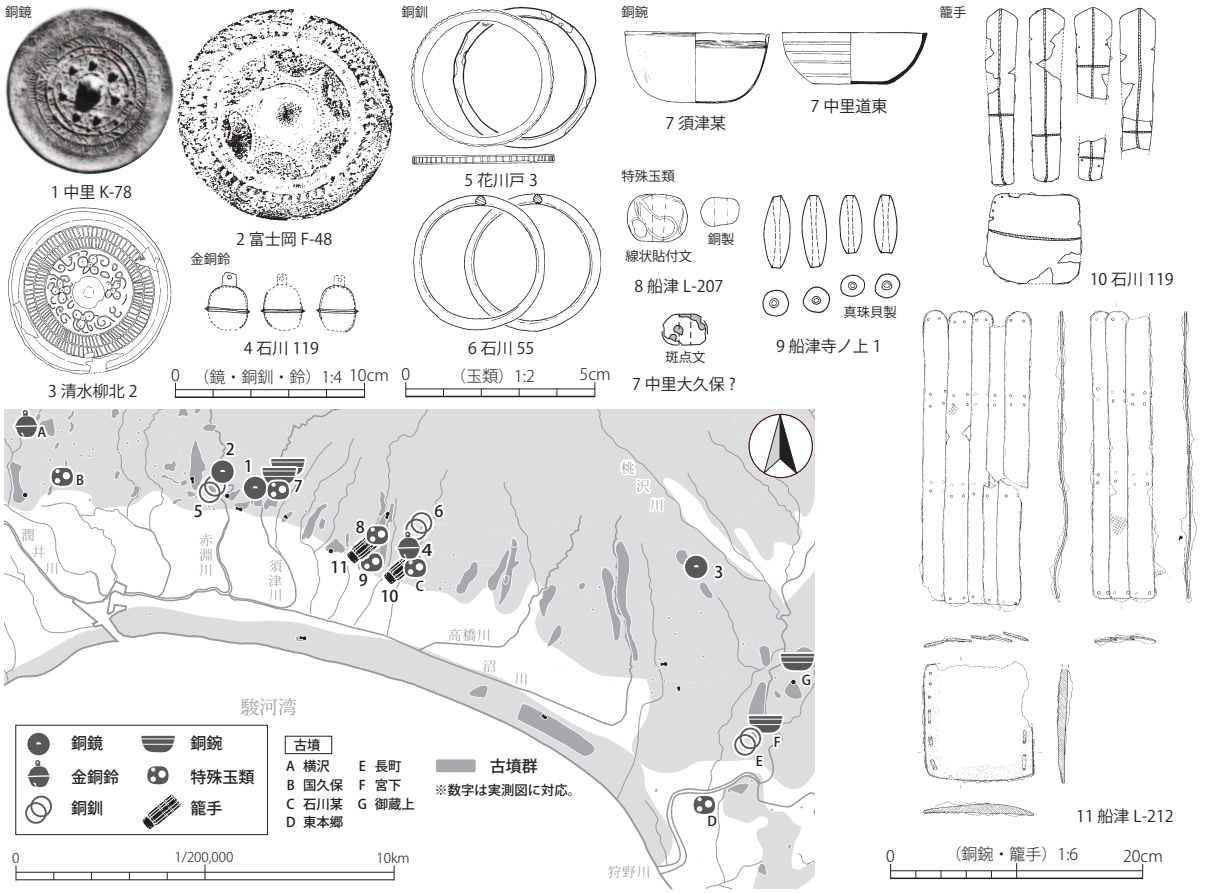

図 4　愛鷹山南麓古墳群周辺の特殊な装身具・銅製品

※ 遺物図は各報告書等より転載